

## プロレスの社会学的考察——『スポーツと文明化／興奮の探究』より——

スポーツ科学専攻 スポーツ文化研究領域

5010A033 斎藤文彦

研究指導教員：リー・トンプソン教授

### ■要旨

本研究はプロレスの社会学的考察を目的とし、スポーツ社会学、スポーツメディア論の立場からこれを取り上げる。ノルベルト・エリアスによれば「スポーツは人間の企てであり、スポーツの社会学的研究には、これまでは知られていなかった、あるいは知られていたとしても漠然としてしか知られていなかったスポーツの様相を明るみに出すという役目がある。スポーツに関する知識は社会に関する知識である」という。

プロレスを観る人びと＝プロレスファンは、なぜプロレスを観るのだろうか。プロレスファンはプロレスになにを求めているのか。社会は、メディアはこれまでプロレスになにを求めてきたのだろうか。

マスメディア研究には大きく分けて①制作 production②内容 contents③オーディエンス audience の3つの領域があるが、本研究ではとくに②内容と③オーディエンス＝観客の領域からプロレスの内容、プロレスと観客の関係、プロレスとオーディエンスの関係においてメディアが果たしてきた役割について考察していく。

アメリカから日本に本格的にプロレスが輸入されてから約60年になる。かつてプロレスは戦後の日本を代表する人気スポーツのひとつであった。“力道山プロレス”はテレビという新しいメディアとともに登場し、プロレスとテレビの関係は「あざなえる縄のごとし」と形容された。

この国のプロレスの歴史において、現在はその人気ももっとも停滞している。プロレスの中継番組はすでに民放・地上波のテレビから姿を消した。ここ数年でほとんどのプロレス専門誌（雑誌、タブロイド紙）は休刊、廃刊に追い込まれ、プロレスを扱っていたスポーツ新聞も数紙が廃刊。現存する駅売りのスポーツ新聞各紙もプロレスの報道を大幅に規模縮小させている。

ところが、プロレス団体の数そのものは力道山時代（昭和30年代）、ジャイアント馬場・アントニオ猪木時代（昭和40年代＝高度経済成長～）からは比較にならないほど増加し、現在は国内だけでも約100団体が活動。毎週土、日曜には全国各地でプロレスの試合がおこなわれ、ここ10年ほどは年間のべ1500公演が開催されている。ほんとうにプロレスは衰退してしまったのだろうか。プロレスとメディアの関係はどのようになっているのだろうか。

本研究は、エリアスの『スポーツと文明化——興奮の探求——』を最初の手がかりに、

リー・トンプソンの『プロレスのフレーム分析』を先行研究として取り上げる。

エリアスは「現代の高度に文明が発達した社会では、すべての人びとが、個人の不安定な気分ばかりでなく、人間関係の場面でも、社会的な場面でも、本能的(性的)・感情的・情緒的な衝動に対してかなり均一で安定した制御を持続している。そういう社会では激怒、憎悪、だれかの頭を殴ってやりたいという衝動はもちろん、激しい感情、反感、嫌悪などをみせる範囲はごく限られている。しかし、人生を通じて強い感情を抑制しつづけることは人間の内部に抑圧の緊張を生み出す。ほとんどの人間社会はこの抑圧の緊張をほぐす対抗策として多様な余暇活動を発展させる。そのうちのひとつがスポーツである」と論じる。

「現代社会における余暇活動は、いろいろな方法や程度の差こそあれ、人びとの感情に直接訴え、感情を刺激し、危険や障害のないところのある種の興奮を引き出すような環境を与えてくれる。ここでいう感情や刺激や興奮とは“想像上の興奮”“情緒的な恐怖や快楽”“模倣的緊張”であり、これらは娯楽を設定することで生み出され、おそらく解放される。想像上の状況のなかで喚起される感情が、現実生活を取り囲んでいる恐怖や脅威の重荷をほんの一瞬だけ取り除いてくれる」(エリアス、1995)

エリアスの理論をプロレスに置き換えてみると、プロレスの社会的な役割や社会的な立ち位置を理解することができるのではないだろうか。プロレスの試合会場は、エリアスが論じるところの“想像上の舞台”であり、リングや音響やレスリングの技による身体動作、レスラーの苦痛や受難を目撃することによって、観客の実人生における悲しみや苦しみが軽減され、感情は浄化され、解放されるのではないだろうか。

トンプソンは、日本で日本のマスコミの研究をしているうちに力道山にたどり着いてしまったのだという。スポーツ社会学でプロレスを扱う場合、八百長-真剣勝負の 이슈 はやはりひじょうに大切であり、「本質的なテーマでありこの問題を避けては通れない。プロレスが果たしてスポーツなのかという疑問はあるが、ゴッフマンのフレーム分析こそプロレスの位置をはっきりさせることができる」としてトンプソンは『プロレスのフレーム分析』を試みた。

トンプソンはその研究をおもに“力道山プロレス”に絞り、プロレスの本質あるいは正体、オーディエンスによるプロレスの受容を明らかにする方法としてゴッフマンのフレーム分析を用いた。しかし、現在のプロレスのオーディエンスにはトンプソンの『プロレスのフレーム分析』にあてはまらない、あるいはフレームからはみ出した層が存在するのではないだろうか。

現 d 代のプロレスのオーディエンス、とくに日本のプロレスのオーディエンスはもっと重層的で(1)プロレスをスポーツ=純粋な競技ととらえる層、(2)プロレスをあくまでもショー=お芝居ととらえ、そのコンテンツを楽しむ層、(3)プロレスが競技であるかスポーツであるかはあまり重要な論点ではなく、プロレスを観るときはそういう議論・疑問にいったんカギをかけ、リング上で起こっていることそのものを受け入れて楽しむ層、そして(4)プロレスの成り立ちや構造を理解したうえで、さらにそれを広義な“真剣勝負”——ある

いは単純に“八百長”とカテゴライズすることはできないなにか——ととらえ、プロレスと自分＝観客の関係を永続的・恒久的に楽しむ層、という4つの層が同時に存在しているのではないだろうか。

本研究では(A)プロレスファンを対象としたアンケート調査＝全体サンプル数 118 人と (B)プロレスファンではない人たちを対象としたアンケート調査＝全体サンプル数 547 人、ふたつの調査を実施。それぞれのアンケートの集計結果から「興奮」「感動」「真剣勝負」「八百長」「芸術」「暴力性」などをキーワードに“プロレスを観る人たち”と“プロレスを観ない人たち”がプロレスというものをどのようにとらえているかを分析、考察を加えた。